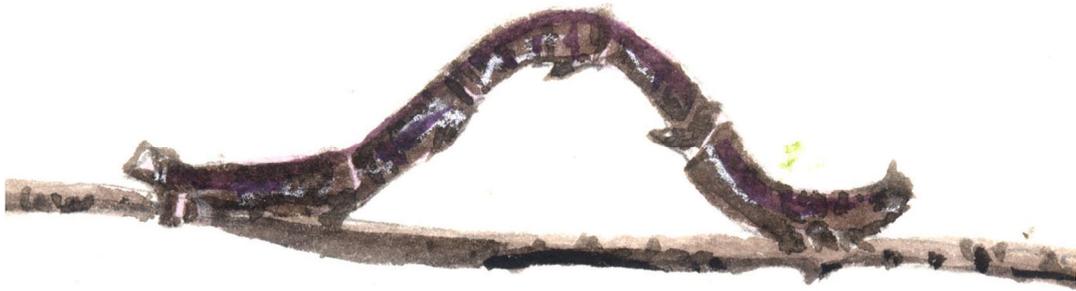


「ヒメツバメエダシャク」

夏の夜、山荘で外灯をつけておくと、実にさまざまな虫がやってきます。ほとんどは蛾なのですが、時にはカブトムシやミヤマクワガタも飛んできます。県道の街路灯の下で、大きな捕虫網を持った研究者を見かけることもあります。

北軽井沢ではこの時期、大型の蛾はあまり見かけません。灯火に集まる蛾もせいぜい5cm程度の小型のものが多く、その半分以上はシャクガの仲間です。シャクガ（尺蛾）は、いわゆる「尺取虫」の成虫です。尺取虫はその名の通り、まるで親指と人差し指で寸法を測っているような動きをするので、この名があります。ユーモラスで一生涯懸命な動きなので、子どもたちにも人気があります。



「尺取虫」 右が頭です。しっぽの部分にある2対の吸盤で枝にしがみつき、次に頭の3対の脚で枝をつかみます。それを繰り返して、枝の上を進みます。

シャクガの仲間（シャクガ科）は非常に種類が多く、図鑑を見てもかなりのページ数をさめています。蛾はもともと見分け（同定）が難しいのですが、特にシャクガ科の中の「エダシャク（枝尺）亜科」という分類群には、似たような蛾がたくさんいて、簡単には見分けられません。幸い蛾は、壁に羽を開いて「羽の表」を見せて「静止姿勢」をとり、朝までじっと動かないことも多いので、うまく写真を撮っておけばあとから同定できます。

夜の山荘に来る蛾もエダシャク亜科の小型の蛾が多く、以前はすべて「小さな蛾」で片づけていたのですが、最近は大いぶ名前がわかるようになってきました。対象の名称がわかると興味が倍増するのは、鉱物も雲も蛾も同じです。



「朝の山荘外壁」

夜に灯火を求めて飛んできた蛾が、そのまま休んでいます。半分以上はシャクガの仲間です。以前は「小さな蛾」で片づけていましたが、今はかなり同定できるようになりました。この写真の中に「ヒメツバメエダシャク」はいません。

私の山荘に来る、多くのシャクガの中でも、特に気に入っているのが、「ヒメツバメエダシャク」という蛾です。漢字で書けば「姫燕枝尺」となります。「後翅の下端が燕の尾のようにとがった、小さなエダシャクガ」という意味です。やや珍しい蛾のようですが、北軽井沢では初夏から夏にかけて、ごく普通に見られます。「ヒメツバメエダシャク」は絹のような質感の羽に薄い筋模様はあった、全身真っ白な蛾です。「これでも蛾なの？」と思うほど美しく、気品さえ感じさせる姿です。



「ヒメツバメエダシャク *Ourapteryx subpunctaria*」

山荘の外灯に誘われて飛んできたものが、外壁で休止姿勢をとりました。北軽井沢で撮影。

実はこのヒメツバメエダシャクに非常によく似た蛾に、「コガタツバメエダシャク」というのがあります。パッと見ほとんど区別はつきません。図鑑にも「よく似ているので同定には注意」とだけ書いてあります。見分け方は、後翅の模様にあります。写真のヒメツバメエダシャクでは、後翅の筋模様がほぼ直角に曲がっていますが、コガタツバメエダシャクのほうは、もっとゆるやかに曲がっています。たったそれだけの違いです。

蛾の見分けは難しいですが、ほんの小さな特徴の差を見つけ出して、種名が確定できた一瞬が面白いと思います。観察力だけではなく、特徴の差を見分けるある種の「勘」も必要です。この夏、山荘に飛来する蛾はすべて同定できるように、努力したいと思います。

(お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋)